

□ イベント等の動き

第15号(平成27年1月15日)

○猿猴橋の復元!

広島市の被爆70周年記念事業として被爆した猿猴橋を建設当時の姿に復元することが決まっており、今年度設計して、来年度完成する予定。戦時中に金属供出のため装飾品が外され、原爆で一部損壊したが、壊滅的な被害は免れて今の姿となる。

四隅の親柱には地球儀の上に羽を広げたブロンズ製の鷲、橋脚の石柱には電飾灯、欄干には桃を奪い合う2匹の猿の装飾が施されていた。2008年に地域住民による「猿猴橋復元の会」が発足し、大正時代の姿に戻すための募金活動を始めていた。

広島県と広島市は駅前大橋から猿猴橋までのエリアを「水都」にふさわしい水辺空間づくりに合意。市は猿猴橋の復元その他、河岸には芝生広場やウッドデッキを整備。県は川底を浚渫して川の水質を浄化し、水上タクシー用に護岸を改修する。

広島駅南口B、Cブロックの再開発と猿猴川沿岸の整備により広島の玄関口に新名所が誕生する。



猿猴橋周辺の整備イメージ
中国新聞(2014.11.5)より



大正末期の姿

第20号(平成27年11月15日)

○二百年ぶりに「通り御祭礼」復活

江戸時代、広島東照宮に祀られる徳川家康公没後50年毎に行われた「通り御祭礼」が、10月10日(土)に200年ぶりに復活した。神職や武士や町役人等の時代衣装をまとった市民約550名が優雅に練り歩き、東照宮から饒津神社までの沿道に集まった約7万2千人の見物人が華やかな歴史絵巻を楽しんだ。

京都には「祇園祭」、東京には「神田祭」、大阪には「天神祭」など、伝統的な神輿行列があるが、広島にも城下町としての風情を残す伝統的な祭りがあった。広島藩の繁栄を願う大行列で城下を挙げて楽しんでいたという。

1815年を最後に幕末の混乱や第1次・第2次世界大戦の影響で途絶えていたが、広島の街の復興が進むにつれ、地元町内会や経済界から「失われた伝統文化を後世に残そう」という声上がり復活が実現した。

被爆で戦前の姿を消失した広島にとって歴史的なものを取り戻していくことは大変意義深い。祭りは平和の象徴であり、これからも周期を縮めて末永く継承されていくことを願う。



被爆を免れた「二百貫神輿」



子供歌舞伎のだんじり屋台

○袋町公園で大イノコ祭り

昨年11月7日・8日と本通り近くの袋町公園で大イノコ祭りがあった。従来の亥の子祭りは、子供たちが「いのこ いのこ いのこ餅 ついて 繁盛せい 繁盛せい」と歌いながら、縄のついた石を地面に打ちつけて町内を回るお祭り。

大イノコは88本の竹の力によって1.5tの大石を空中に吊り上げ、その大石を「亥の子石」に見立てた新しいスタイルの「イノコ」である。4方から2本ずつ竹と大石をロープで結んでいき、10回目前後から浮き上がっていく、そのプロセスに臨場感がある。

大イノコ祭りは1990年から1996年まで7回続いたが、一度途絶えて2013年に復活し、今年で3回目。前回までは国からの補助金でやり繰りしていたが、今回から協賛金を募り自前の予算で若者たちが中心となって企画し運営した。初日はなんとか天気を持って人も集まり、屋台も賑わっていたが、二日目は生憎の雨模様で人も激減した。大イノコ祭り自体まだ歴史が浅く、広く市民に浸透しているとは言い難い。採算が取れなければ、やる気が萎えてしまう恐れもあるが、なんとか乗り越えて欲しい。若い人たちに期待したい。



大イノコ

○都道府県対抗男子駅伝と県人会

今年21回目を迎えた天皇盃全国都道府県対抗男子駅伝は1月24日(日)、時折小雪舞う、凍てつくような寒さの中、平和記念公園⇒宮島口折り返しの48キロのコースで行われました。広島県チームは第1回大会以来の優勝を目指して序盤から好位置につけてトップ愛知を猛追しましたが、及ばず2位に終わりました。

都道府県対抗男子駅伝の誕生

この大会の前史があるのをご存知でしょうか？1931年から戦争中の中断を挟んで1995年まで、福山―広島間107キロで62回大会まで行われた中国駅伝です。元日の実業団駅伝等と並んで日本三大駅伝とも称され、当時の強豪チーム、旭化成、リッカー、カネボウなどが参加する駅伝でした。

日本陸連は京都で先行して開催していた女子の都道府県対抗駅伝の成功で、男子も、ということになり中国駅伝を主催する中国新聞にこの話が持ち込まれました。駅伝、マラソンは12月～3月初めまでの冬季に限られ、ほとんど毎週レースが組み込まれています。そのため、陸連は1月第三週の日曜日を基本に行われる「中国駅伝の発展的解消、衣替え」を打診したのです。当初、中国新聞内部では根強い反対論がありました。そのひとつは〇〇体協で出る郡市の部が消滅することでした。ただ、陸連からもし受けなければ同日開催で福岡などに持っていくと言われ、結局受け入れざるを得なかったのが真相のようです。

県人会組織

1996年の第一回まで時間がない中、中国新聞内部では紙面でのPRのほか沿道での盛り上げ、観客動員を図るアイデア出しが行われ、出てきたのが「ふるさと応援団」でした。これは広島在住の各県出身者に県人会組織を作ってもらい「おらが故郷のチームを応援しよう」ということです。前年の秋も深まるころ中国新聞が各県に問い合わせたところ、隣県の島根、鳥取のほか北海道、宮城など12道県の組織があることが分かりました。新聞社ではさらに増やそうと新聞広告を通じての呼びかけとその自治体とつながりの深い企業等(銀行、ゼネコン、



スタート直前
ご当地キャラも応援

自衛隊＝千葉…)に協力を仰ぎ、第1回大会まで21の自治体の県人会組織が立ち上がりました。その際、「〇〇県」と染め抜いた「応援旗」30本が新聞社から寄贈されました。

その後、会を追うごとに組織化が進み第6回大会で広島を除く46都道府県の県人会組織が立ち上がりました。各県旗が林立する、それがこの大会の沿道風景の名物として今日まで続いています。因みに女子の京都では30数県に留まっているそうです。大会当日、朝10時から平和資料館前で1区から7区まで、北から南までブロックごとに全出場選手が紹介されます。選手名がコールされるごとに県旗が揺れ、「〇〇頑張れ」「〇〇ケッパレ」と声援が飛び交います。これも“県人会効果”でしょう。

ふるさとひろば

この大会のもう一つの特徴は「ふるさとひろば」です。スタート地点の道路を挟んで両サイドでの郷土料理コーナーと特産品コーナーには40の県人会が「店」を出しています。今年はことのほか寒かったこともあり北海道のホタテ姿焼き、鳥取のかに汁には長蛇の列ができていました。

富山県の事務局長を長年務める今井利行さんは「ことしは雪予報もあり、観客は少ないと思い鱒寿司と蒲鉾の仕入れを少なくしたが、10時過ぎには売り切れた」「間違いなくこの駅伝で県人同士のつながりが深まった」と。また岩手県チームの選手慰労会を引き受けている飲食店経営の奥芝隆さんは「もう10数年やってもらっている。このきっかけで普段でも二次会等で店を利用してもらっている」とのこと。

また、地域連携の動きもあり、北信越5県は11月に懇親会を開いているほか、北海道と九州は「北海道・九州圏人会」をつくり年二回、交流会を行っています。ことほど左様にこの大会が異郷で暮らす県人同士の絆作りに果たしている役割は大きいものがあります。

ただ、問題もあるようで今井さんは「県人会もご多分に漏れず高齢化が進んでいます。それは転勤族など若い人が入らないことです。」「今は広島で成功した方のご厚意に甘えているところがあるが、その方に何かあると組織の維持は難しいかもしれない」と。

なお、広島県チームは5年前から私が所属する奉仕団体を中心にした組織が大会終了後、選手の慰労会を開いていることを申し添えておきます。

(編集委員 三宅恭次)



スタート前の選手紹介



ふるさとひろば会場



秋田のナマハゲも登場

第23号 (平成28年5月15日)

① 猿猴橋復元・祭り「えんこうさん」

広島市の被爆70周年事業として完成した猿猴橋復元を祝して、市が主催する記念式典とえんこうさん実行委員会による渡り初め式、点灯式等の祭り「えんこうさん」が3月28日に行われ、多くの市民が喜びを共にした。

江戸時代の頃の猿猴橋は、西国街道の広島藩の入口として木橋が架かり、周辺は宿場や屋台が立ち随分賑わっていた。大正15年に今の橋に架け替えられ、橋の親柱に飾られた青銅製の照明灯と地球儀の上で羽ばたく鷹の像の優美な姿は、「西日本一の橋」と称されていた。

戦時下では装飾の金属が供出され、原爆投下により欄干の一部が破損したが、今に生き残った。戦後の復興と発展を見続けてきた猿猴橋を、大正時代の姿に復元したいという地元住民の熱い思いを受けて、市が被爆70年を記念した事業として採択した。



渡り初め (読売新聞 3/29)

広島駅南口B・Cブロックの再開発ビルも完成間近に迫り、猿猴橋周辺の水辺も親水護岸に整備される予定である。まちの中心地を横切る西国街道を再評価する機運も高まり、猿猴橋の復元を契機に、昔からの賑わいを取り戻すための祭り「えんこうさん」を恒例行事にしたいと聞く。水の都ひろしまの玄関として、広島魅力を発信する新たな名所が誕生し、駅前地区から八丁堀・紙屋町地区まで一体となって発展していくことが期待される。

第29号（平成29年5月15日）

○ 猿猴橋の「川の駅」完成

広島県・市が連携して広島駅南口に建つビッグフロントひろしま前の河岸緑地を整備し、「川の駅」として水上交通の発着点や人が賑わう広場が完成。3月25日に昨年復元した猿猴橋をシンボルとした祭「えんこうさん」と合わせて河岸緑地の完成式典を開催。

河岸緑地は、観光客や水辺を訪れる人たちが憩える休憩所、イベントなどに使用できる多目的スペースや芝生広場を整備。ミニコンサート、フリーマーケット、移動販売車等による飲食なども可能。地域住民の交流の場として朝市やカフェなども定期的に開催予定。

『水の都広島』の玄関口にふさわしい象徴的な水辺空間が誕生したことは、駅周辺のブランドを高めることが期待できる。



位置図



イメージ図

第32号（平成29年11月15日）

② 地域に根差した大イノコ祭りへ

第15回ひろしま街づくりデザイン賞（2015年度）を受賞した大イノコ祭りが今年も11月4・5日に袋町公園で開催。2013年に復活して5回目である。

昔からの「亥の子祭り」を発展させて、88本の竹の力で1.5トンの大石をついて福を願う広島の新しい祭りである。その竹を今年から江田島の竹林を伐採するところから取り組んでいる。

また広島国際大学の学生が企画段階から参画して、袋町の老舗の和菓子屋とコラボして和菓子を創作し、その販売とお好み焼きを出店。

初日のメインイベントは地元の子供たちの手で大石を浮かせること。東西南北に分かれて、4方から順に竹の先端につながれたロープを大石にひっかけて引っ張っていく。今回は17番目（竹68本）で浮き上がった。その瞬間の子供たちの喜びようは感動もの。

その後、大石を「亥の子石」に見立てた「大イノコ」（石動いすぎ）を行う。夜は幻想的にライトアップされた竹のサークル内で石動への奉納の儀式が厳かに執り行われ、伝統と現代アートの見事な融合だ。

公園の一角では竹遊びひろばが開かれ、家族連れの子供たちが昔ながらの竹のおもちゃ作りに楽しんでいる。また、折り鶴のお焚きあげ「はばたき」は世界中からの願いを天に羽ばたかせる営みという。この祭も段々と輪を広げ、地域の祭として着実に根を張りつつある。



子供達による綱引き



大石が浮いた状況



折り鶴のお焚きあげ

□ 平和の鐘

第18号(平成27年7月15日)

○ 「平和の鐘」響け再び 記念式典の開催！

1. 開催の趣旨

広島市中央公園・ハノーバー庭園近くに「平和の鐘」が今もひっそりとたたずんでいます。現存する最古の「平和の鐘」です。

昭和24年(1949)8月5日、広島銅合金鑄造会が広島平和記念都市建設法制定を記念して広島市に寄贈したものです。原爆犠牲者の鎮魂と平和の願いをこめて焼け跡から集めた金属を鑄込んで造り、「No more Hiroshimas」の英文と平和の象徴の鳩の羽ばたきが刻み込まれています。

この「平和の鐘」は、同年8月6日の第3回平和祭(現在の平和記念式典)で鳴らされたただけで、その後の式典で一度も鳴らされたことはありません。

被爆70周年の今年8月6日、世界平和を願う市民の手により、「平和の鐘」の響きを66年ぶりによみがえらせたい。このために「まちづくりひろしま」編集委員及び関係者有志により「平和の鐘」響け再び実行委員会を立ち上げ、「平和の鐘」前広場で記念式典を開催します。

2. 記念式典の概要

- ① 日時 : 平成27年8月6日(木) 午前9:30~10:00(雨天決行)
- ② 場所 : 「平和の鐘」北側広場(中央公園・ハノーバー庭園となり)
- ③ 参加者 : 約100人(一般の参加も自由です)
- ④ 式次第 : 開式・黙祷、代表あいさつ、経過報告、「平和の鐘」点打、「ひろしま平和の歌」合唱(広島合唱同好会)、閉会
- ⑤ 主催者 : 「平和の鐘」響け再び実行委員会



二代目「平和の鐘」
(2014年12月撮影)

(参考)「平和の鐘」の略歴

初代	1947年~1948年	1951年3月盗難
二代	1949年	広島銅合金鑄造会が寄贈
(1950年:式典中止)		
(1951年:式典再開するも鐘を不使用)		
三代	1952年~1964年	光元寺から借り受け
四代	1965年~1966年	観音寺から借り受け
五代	1967年~現在	人間国宝・香取雅彦氏が寄贈



出典:被爆50周年写真集
「ヒロシマの記録」中国新聞社

二代目「平和の鐘」爆心へ

安佐郡緑井村で鑄造された「平和の鐘」は1949年8月5日朝、横川駅から荷車で市内へ。金銀朱塗りの鞍をのせた牛7頭、馬3頭に引かれて、新しい「平和の鐘」が相生橋を渡り、旧護国神社前(市民広場)の鉄骨の平和塔につりさげられた。



出典：同上

第3回平和祭（平和記念式典）

翌日の8月6日、3千人の市民が市民広場に参列し、前日に搬入された二代目「平和の鐘」が打ち鳴らされた。左の写真手前の鉄骨の塔に吊られているのが「平和の鐘」。中央公園ハノーバー庭園近くに現存。この年の式典だけが旧護国神社前の「市民広場」（現在の中央公園）で開催された。

（実行委員会代表 高東博視）

第19号(平成27年9月15日)

〇66年ぶり平和の音色～「平和の鐘」響け再び記念式～

- ◆ 日 時：平成27年8月6日（木）午前9：30～10：00 晴れ
- ◆ 場 所：中央公園・ハノーバー庭園となり
- ◆ 主 催：「平和の鐘」響け再び実行委員会

8月6日の朝、広島合唱同好会（30人）の「ひろしま平和の歌」合唱に続き、「平和の鐘」が66年ぶり「カーン、カーン」と広島の空に鳴り響いた。

この鐘は、昭和24年（1949年）広島銅合金鑄造会が広島平和記念都市建設法の制定を記念して広島市に寄贈されたもの。現存する最古の「平和の鐘」だ。

“鐘の音をもう一度聞きたい”という鑄造会・遺族らの願いを伝え聞いた「まちづくりひろしま」編集委員ら市民有志10人が実行委員会を設立して企画した。

記念式には遺族、原爆市長・浜井信三ご子息ほか関係者約130人が参加し、順番に鐘を鳴らした。参加者の中には感動で涙を浮かべる姿があり、また「今後も鳴らし続けてほしい」との声も多く聞かれた。マスコミの関心も非常に高く報道関係9社の取材があり、大きくテレビ・新聞などで報道された。

実行委員会は、この記念式を毎年8月6日に開催していけるよう努力していきます。

ご支援・ご協力頂いた多くの皆様に心から感謝申し上げます。

（実行委員会代表 高東博視）



第25号（平成28年9月15日）

① 二代目「平和の鐘」今年も ～響け！平和の鐘 記念式～

- 日 時： 平成28年8月6日（土）9：30～10：45 晴れ
場 所： 中央公園・ハノーバー庭園の南広場
主 催： 響け！平和の鐘 実行委員会

忘れ去られた二代目「平和の鐘」が、今年も原爆の日に市民の手で打ち鳴らされた。

参加者全員の黙とう、広島合唱同好会の「ひろしま平和の歌」



「ひろしま平和の歌」合唱

合唱に続き、「カーン、カーン」と広島の高く鳴り響いた。被爆70周年の昨年、「まちづくりひろしま」編集委員を中心に市民有志10人が実行委員会を立ち上げ企画したのが始まり。

記念式には「平和の鐘」を製作した関係者の遺族、原爆市長・浜井信三ご子息など約120人が参加し、みんなが順番に鐘を鳴らした。高松市から参加の孝岡楚田(たかおかそでん)・弘子ご夫妻は「毎年この時期、広島に来るとこの鐘を見上げます」と記帳。



鐘を鳴らす参加者

今年は「ヒロシマ平和創造基金」の支援も受けた。実行委員会はこの記念式を毎年8月6日に続けていく。ヒロシマの生き証人ともいえる二代目「平和の鐘」が、より広く世間に知られ、記念式への一般参加者が増えることが期待される。

終わりに、去る8月29日、平賀繁彦様のご逝去されました(87歳)。鐘の製作に係わった関係者のうち唯一ご存命で、記念式にも毎年ご参加頂きました。

ここに謹んで哀悼の意を捧げます。

(実行委員会代表 高東博視)



実行委員会メンバー

第31号(平成29年9月15日)

① 「平和の鐘」讃歌を披露 ～第3回 響け! 平和の鐘祈念式～

- ◆ 日時: 平成29年8月6日(日) 9:30～10:15 晴れ
- ◆ 場所: 中央公園・ハノーバー庭園の南広場
- ◆ 主催: 響け! 平和の鐘 実行委員会

忘れ去られた2代目「平和の鐘」が今年も原爆の日市民の手で打ち鳴らされた。そしてこの「鐘」をテーマにした合唱曲が初めて披露された。新曲は実行委員会が、大阪府泉佐野市在住、あきたかし氏(本名・水野喬)に作詞・作曲してもらった「鐘よ 平和の鐘よ」。広島合唱同好会(代表 大上義輝)の男女40人が、優しい響きの歌声で披露。参加者は市民ら150人。

再びの命が鳴らす 今日の音色は♪
優しく、清く、高らかに (中略) 平和の鐘よ♪
さあ鐘よ、その高みから 世界へ響け♪



原爆死没者に黙祷する参加者



「平和の鐘」の前で新曲を披露
読売新聞(8月7日)より

この「鐘」を歴史の彼方に忘れ去ることは被爆の惨禍を風化させることに繋がる。今こそ「鐘」の存在が広く知られ、後世に語り継がれなければならない。「鐘」を打ち鳴らす祈念式と合唱曲「鐘よ 平和の鐘よ」の発表で2代目「平和の鐘」の認知度がさらに高まることが期待される。

(実行委員会代表 高東博視)